（学位第８号様式）

No. 1

学位論文審査結果の要旨

学位申請者 氏　　名	Nambooze Joweria
審査委員	主査　佐賀　大学　教授　稲岡　司
	副査　佐賀　大学　准教授　藤村　美穂
	副査　鹿児島大学　教授　秋山　邦裕
	副査　佐賀大学　准教授　上野　大介
	副査　琉球　大学　教授　仲間　勇栄
審査協力者	
題　　目	**Nutritional Status and Health of Vulnerable Populations in Rural Southern Laos with Special Focus on Ethnic Minorities** （ラオス南部農村部に居住する栄養学的脆弱集団（特に少数民族）の栄養状態と健康）

本研究は、世界の最貧国の一つであるラオスを調査対象とし、農村部に居住する栄養学的脆弱集団（特に少数民族）の栄養状態、および栄養状態と健康の関連について評価したものである。

ラオスは世界の最貧国の一つであり、子供の栄養失調が多いことで知られていること、ラオス南部は洪水の常襲地域で、調査中の 2009 年 9 月にも洪水によって水田が壊滅状態になり農村部ではそれが栄養状態にも影響を与えていると予測されたためである。栄養学的脆弱集団として、少数民族という要因に加えて子供と高齢者が選定されたのは、子供や高齢者は行動圏が狭く自分で食糧を獲得したり調理したりするのが困難であるため、家庭の食糧摂取環境の影響を受けやすいからである。さらに、ラオスでは平均寿命の延長にともなって 65 歳以上高齢者人口が増え続けると考えられるにもかかわらず、特に遠隔地農村に居住する高齢者については、栄養状態や健康状態のみならず人数などの基礎的なデータの収集さえほとんど行われていないため、高齢者の栄養摂取の実態を把握することも重要であると判断されたからである。

本研究では、具体的にはラオス南部のアタプー県を調査地とし、1) 少数民族の5歳未満の子供の栄養状態の実態と栄養失調の原因を明らかにする、2) 少数民族と支配的民族の 65歳以上の高齢者の栄養状態と生活機能(ADL, ADL)の実態を明らかにし、民族間の比較をとおして高齢者に栄養失調をもたらす要因を検討することを、２つの柱とした。

子供の調査はソムスック村に居住する5歳未満の子供43名(Oy族)を対象とした2010年、2011年の調査の結果、両年ともにOy族の子供は県の平均と比べて栄養状態が悪く、とくに低身長の割合が高い（2010年-55.8%、2011年-65.1%）ことが明らかになった。また、栄養状態は、低年齢、女児、多人数世帯であるほど悪くなっていた（R^2=46%, P<0.01)。

他方、台風被害前後の栄養状態を比べると、食糧摂取回数や摂取食品群の種類は一年たっても回復していないにもかかわらず、子供の栄養状態は急激に低下することなく比較的安定していることが明らかとなった。観察や聞き取りから、村内での物々交換や採集など、食糧獲得のための対処行動を行うことができたからだと考えられる。

高齢者の栄養状態（MNA調査）は、支配民族（Lao族）と比べて少数民族（Oy族、Brau族）の高齢者の栄養状態が有意に低かったが、少数民族の生活機能 (IADL)は他と差はなかった。また、栄養状態と生活機能（ADL）は関連がなかった。栄養状態と関連する要因は、ＢＭＩや食欲や病気といった共通要因に加えて、ストレス(Oy族、Brau族)、フードタブー(Brau族)、生活機能 (IADL) (Lao族）などが、民族ごとに異なった要因となっていた。

以上の結果、少数民族は子供も高齢者も栄養状態が悪いこと、また高齢者の栄養状態に関連する要因は民族ごとに異なっていることが明らかにされた。論文では、さらに、出産前後の母親や高齢者のフードタブー、ストレスの内容など、栄養状態に影響を与える間接的な要因を検討し、地域や民族の生活形態にあわせた支援や教育が必要であることを指摘し、高齢者の栄養状態を評価するためのフレームワークを作成した。

子供の栄養状態については、ラオス政府や海外の機関などによる調査や援助プログラムも多いが、高齢者については基礎資料さえほとんど存在しないことを考えると、本研究は今後の高齢者の栄養改善に関する貴重な資料となることは確実である。また、民族によって異なる生活習慣や近年の生活様式の変化などをふまえて栄養状態を評価した本研究は、多くのプロジェクトで採用されている栄養学的な枠組みにとどまらず、栄養指導の現場においても応用できるものである。

以上、本論文は農学・人類生態学・公衆衛生・農村社会学等の学際的領域に新たな視点を加えるとともに貴重なデータを提供したことから、博士（学術）の学位を与えるに十分な価値を有するものと判定した。